

6—生きることは願うことである

(1) 寮母は宝

福祉施設で利用者を世話することを「処遇」とよんでいる。待遇と同じであるが、措置、処遇等の福祉用語には何かしら、冷たさと官僚性がぬけきっていない。ともあれ、手厚い処遇は施設存在の唯一の目的である。

処遇がそれほどでもない施設でも、相当よい処遇をしているものと安心しがちであり、厚い処遇を心がけている者ほど、行き届かないのを気にするようである。任運荘の寮母がある会合(九州プロック大会 54・7・4、長崎市)で「床ずれはない」と発表すると、助言者の某施設長が「それはおかしい、私の施設でさえ数名はいるのに……」といった。名もないホームのいうことは信用できないといたないのであろう。こうしたことは福祉に限ったことではなく、人間の弱点に根ざすものである。だから、福祉の研修会でも、困難な問題に立ち向かうとか、処遇を一步深めるとかいうことには必



ずしも余り熱意を示さない。逆に、仕事をどう合理化して、処遇の手を省くか、などの問題になると大まじめに情報を交換しあい、できれば低い処遇へ合わせていこうとする。うっかりすると、利用者をつちのけにした処遇の研修会になりかねない。だから、そのためにも、福祉職とは一体何なのか、他の職業とどういう違いをもっているかが明らかにしていなければならぬ。

多種多様の職業の中で、人間と人間とが直接触れ合う職業として教育・医療・福祉の仕事があげられる。その中でも福祉職は人間が丸ごと関係しあう独特の構造をもっている。

医者として赤道アフリカで献身的奉仕を行ったシュバイツァーはいう。「生計のため、また社会の要求を満たすため、多かれ少なかれ死んだ仕事を職業としなくてはならない。―これが多くの人びとの運命である」。彼は続けていう。ひとはそんな「職業生活のかたわら、自己の人間的生活を救う道がある。それはただ助けを求めている人びとに対して、いかなるささいなことについても、一個の人間として対することである。その機会をもらさず捉えることである。人間が真の人間性をもって人間に働きかける。―これにこそ人類の将来はかかっている」。

福祉職とはまさにシュバイツァーのいわんとする「生きた仕事」といえよう。人類の未来が確かにそれにかかっている職業であろう。

こう考えると福祉職は天職という内容をもっている。天職とは従事するその職業が絶対的なるものとのつながりを意識せざるを得ないところに自覚されるものであろう。だから天職は客観的に存在することはない。あくまでもその職を通して生ずる主観的な意識内に存在する。ひとが常に真の

人間性を努力しつつ人に接する。接する彼方にいつしか人ならぬものを仰望しないだろうか。

人間性の自覚のない者のする福祉職が天職でないのはいうまでもない。人間性を没却して、天職だといって働かすのもナンセンスである。天職とは自覚の深化の中に自ら生ずるものであろう。

さて、特養における寮母職とはおむつ換えより始まって、それに帰る仕事であると考ええる。そんな仕事を初めは恥しいと思う者もいるだろう。北陸の某ホームでは、「どの寮母も特養老人ホームに勤めていることを周囲に隠している」(森幹郎『老人ホーム論』一二三頁)。もし、彼女たちが何時までもたってもそうであるなら、仕事らしい仕事をしていないからである。

任運荘の場合はどうか。おむつ換えの仕事はこの町でも空前のことで、しりごみもしただろう。単に生活のためにこの職にとびこんだのかもしれない。彼女にとってシュバイツァーのいう「社会の必要のための死んだ仕事」であったかもしれない。

しかし、顧みられることもなく、ここに苦悩し、悲しみ、不安げに見上げる老いたる顔を眼にする時、彼女たちは初めから必死にそれに応えねばならなかった。仕事は手探りの無我夢中の連続であった。幾週すぎたか、幾月たったか分からない。ある日、「あなたは変わったね」と家族にいわれて、ようやくわが身を振りかえる。たしかに今までとは変わったと思う時もあるだろう。

心のこめよう一つで、結果がこんなにはっきりはね返ってくる仕事。仕がいもまた直接的に感じられてくる。仕事の仕がいは、自分がいっそう生きているという感覚、仕事によって新たに自分が生かされている喜びである。フランスの思想家ルソーは教育を讃えて、「この崇高なるもの、金

にかえられないもの」といったが、彼女たちも福祉の職をルソーと同じように、そう心の中でたたえることがあるにちがいない。

私はその小さな証のようなものに出会うことがある。

広場の壁に一葉の手紙が小さく掲示されている。子供の字である。

「任運荘のおじいさん、おばあさん、お元気ですか。毎日どんなふうにおすごしですか。たいくつではありませんか。なにか、あみもの、人形作り……そんなことをやってみませんか。

わたしのお母さん(森いく子)を、ドジだけどよろしくおねがいします。

二月四日

緒方小 四年 森 陽子

差出人の小学生の母のいく子さんは任運荘に勤めてまだ間がない。

母の帰りを待ちわびていたこの母子家庭の夕餉で、話題の中心は何といっても母の新しい職場のことになってしまふ。お年寄りを世話する仕事の難しさを、きつと母は話しているだろう。難しさとは尊さであることを、幼い子は定かではないが感じとっている。こんな仕事をしている母を、子は内心頼もしく誇らしく思い始めた。

母もまた仕事のことをわが子に語れる内容であるのに、深い安らぎをもっている。母と子の心は仕事を通してしっかり結びあっているようだ。それだけに、この間お茶碗を割ってしまった母のそこつさが心配でならなくなった。こんな大事な仕事をしくじっては大変だ、祈りをこめて、お年寄

りをお願いしよう。

そう思い立つと、母にもいわず夢中でお手紙を書き、ポストに入れてしまった。たぶんそうした後で、そっと母に告げたに違いない。

幼い心に映った母の仕事と母の働きぶり、それはそのまま、任運荘で寮母たちが織りなす仕事への取り組みの姿でもある。森一家と同じようなことが、他の寮母たちの家にもあって、「生きた仕事」を持つ母や妻の話題がしばしば中心をなしていることだろう。

「人間」ほど話題にふさわしいテーマはなく、「人間性を以って」対せねばならぬ仕事の話しほど人を引きつけるものはない。

任運荘で一日を過した小林昭三氏(当時厚生省老人福祉課長補佐)が去り際に、「寮母は宝ですね」と私にささやいた。一般的に寮母職の重要さをさしていったのかもしれないが、任運荘の寮母がそうであるといわれたように聞えた。

寮母は宝。——この基盤なくして福祉施設は存在することはできない。

(2) 人間は欲求の束

福祉とは人間が人間を直接的に援助することであった。だから、福祉の仕事を進める場合、ことあるごとに人間とは何かという問題にぶつかる。

人間を規定する言葉はいろいろあるが、「人間は欲望の束である」とする立場が適切な捉え方であらう。生きているということは欲望を持っていることである。無数無限の欲望を抱えており、その時その場に応じて、欲望の束の中から一つの欲求をぬき出すように選び出して、それを満たそうとする。欲望を選択し決定した結果については、満足か不満かの何れかを感じる。

重要な選択を迫られた時に下した欲望の決定には、「しまった」「ああすればよかった」等の後悔が伴いがちである。こうした後悔は、「ああすることもできたのに、こうしてしまった」という自由意志の存在の証明である。人間が欲望の束という時、人間は自由の主体であり、いつも自己決定に生きる存在であるということである。

心を苦しめる後悔は、欲望を選び損ねたとか、やり方が下手だったという程度で起こるものではない。人間的後悔とは人間の中にある動物的欲求と人間的欲求との葛藤かつどうにおいて、後者が敗北する場合に起こるものである。人間は諸欲の矛盾に苦しみ、負けても、明日をめざして出直す存在である。常に新しい自己をめざす創造的存在である。願いを捨てることのないもの、それが生命である。生きることは願うことである。願うということは自己決定の主体であるということである。人間は常に内なる自律的生命に促されて明日をめざし、願ねがきながらも創造的に生きることを止めようという。

福祉施設で仕事をする時、人間のこうした仕組みを理解しているかどうかが重要な関係をもつ。相手が能力のない者のように思えても、勝手に扱うと痛い反撥はんぱくを受けるであらう。

特養老人の場合、勝手に老人に代って欲求を選定しておしつけることは間違いで、老人じしんがその気になり、また、その気にならすように間接的にしむけるだけである。しかし、このやり方は倦まずたゆまざる長い努力を持続することであるから、難行に近い。その過程の中で何が老人の真の願いであるかを見透すことに成功しなければならぬ。時間をかけ、相手の立場を思いやる心さえある限り、人間どうしの間柄だから何らかの解決はあると信じてよい。その卑近な例を『にんうん荘』（22号・54・5・1）の報告「Fさんのこと」に見よう。

Fさん（女七九）は五十年末脳軟化症で入居しました。その日孫娘は「ばあちゃん、今度の連休には面会に来るからね」と約束して帰りました。入浴、散髪と身なりを整えてもらうと、「ああさっぱりした。早くここに来ればよかった」と、それから丸二日間ぐっすり眠りこみました。

食事の取り方が粗食にすぎるので注意すると、「自分のことは自分が一番よく知っている」ととりあわない。家にいる時からおむつ使用ですが、トイレに行くのがきらいだといって聞きません。何が気に入らなかったのか、おむつに手を入れてあたりかまわず塗りたくります。

三カ月たって自分より不自由な人がリハビリやトイレに行くのを見て、やっとトイレに行くようになり、気が向くと寝たきりの人の下膳を手伝ったりします。多分、家ではおむつにくるまって、その欲求不満をウンコをぶつけて晴らしていたのでしょう。食堂で食事をとすすめると、「いらん世話をせんでも、いいようにするわー」とすごい形相。やがて、「食堂に行ったらご飯がおいし

いなゝー」というようになります。行事に参加を勧めると、「わしは若い時から働いてきたので今は寝るのが楽しみじゃ」。

生活に意欲を持たせようと部屋がえをする。同室のKさんは短歌を作ったり、自分で食事をしようとする型の人です。Fさんの表情はしだいに明るくなり、Kさんと昔の歌を歌ったりします。歌詞を三番まで覚えているFさんを、「頭がいいんだなァー」と皆が感心します。

毎月の扶助費三千元を渡すと「だまされているようだ」といいます。同室の人がナース・コールを激しく鳴らすと、「甘えるもんじゃない」とピシリ。そんなFさんに四年めになっても家族の面会はない。しばしば面会を促すが、実子なのに来ません。同室の人に面会があると、布団を頭からかぶってしまいます。後の荒れようは妻まじい限りです。夜若い寮母は震え上がります。「さあ、殺すなら殺せっ」と胸ぐらをつかまんばかりです。多分、家で息子からそのように扱われていたのでしょう。

老人から家郷へ送る「ふるさとへの便り」で、一回めは手型を押し「元気でいるから安心してくれ」と書き添えました。返事はない。だから、二回めからは書こうとはしません。しかし、四年めに初めてFさんへ面会がありました。福祉事務所の職員です。たぶんよいことづくめをいって喜ばせたのでしょう。その夜はすっかり動転し、一晩中夜勤者について回り、「いつ家から来るのか、もう電話があるはずだ」と尋ねる。指輪を抜いて寮母に与えようとする。もらうばかりの生活が苦しかったのだろう。同室者を一人ずつ掴まえては、「肩身が狭かったが、家のもんが持ってくるか

らお返しするきナー」と話しははずみまず。

身なりを全く構わなかったのに、最近は食堂に行く時も髪をなでつけ、羽織をはおって来ます。四年間一度も「帰りたい」といったこともないのに、ただ一度の訪問客によってこれほどまでに心が動かされ、本来の気持ちに戻ってきたようです。私たちが家族との断絶がこれほどまでにFさんを損ねているとは気がつきませんでした。私たちは手をかえ、品をかえて、福祉事務所にも働きかけて、家族の訪問を求めているが、彼女の心の底に潜む願いはまだ叶えられていません。

身内の面会もさることながら、彼女の心にそう動くことが私たちの仕事のすすめ方である。私たちが変ることによって、彼女も変っていくことができるであろう。

私たちが変化するのは、彼女を変えようとする構えを捨てることである。彼女が変わるのを待つのである。ただ慢然と待つのは勿論ない。彼女にふさわしいと思われる条件を与えてみる、きっかけを作る。彼女がそのきっかけを掴む力を信じ、待つ。条件整備に上手下手はあろう、ただ心の中でバカにしたり、憎んだりしなければよい。シュバイツァーのいう真の人間性をもって接し続けねばならない。事実、彼女は今たしかに変わりつつある。ギリシアの哲学者ソクラテスは自分の教育の仕事を産婆術と称した。人が出産するのを手助けするだけという意味である。その人に代って出産することは勿論できることではなく、その人の中にあるものを引っ張り出す手助けをする。それが教育の原理であると教えた。

(3) 基本的欲求の充足さえ危なく

さきに、諸々の欲望を人間的なものと動物的なものとに区別した。こうした無数無限の欲望を幾つかの段階に整理し、分類しておく、処遇の過程でも筋道が立てられてしやすくなる。その分類のし方はいろいろあるが、アメリカの心理学者であるA・H・マズローのそれに従うのが便利であろう(マズロー『人間性の心理学』小口忠彦訳)。

(1) 生理的欲求 これは生得的で生存するために必要な基本的なもので、他のすべての欲求よりも優勢である。食欲を中心として睡眠欲・運動欲・性欲等がそれで、動物にもあるから動物的欲求とも呼ばれる。この欲求を基礎にして他のより高次の欲求が出現する。

(2) 安全欲求 わが身や家族に危険がないよう、安全で健康的であり、心も平安であるようにという欲求は、人間にとって生理的欲求に次いで現われる。私たちは平和に生きているから、この欲求に気づかない場合もあるが、かりに安全より重要なことはないという状態が慢性化しているならば、人間は安全を求めてのみ生きている存在になるにちがいない。

(3) 所属と愛の欲求 生理的欲求と安全の欲求がかなり満足されると、愛情・所属の欲求が起ってくる。「人は他者との愛情に満ちた関係、自分の所属しているグループ内での地位を切望している。この目標達成のために一生けんめい努力する。人間社会において、これらの欲求がじゃま

れると不適応の原因となる」。愛の欲求には当然与える愛と受ける愛とがあるが、子供だけでなく、老年にもまた愛されたい想いは強く生き続けている。前節に出てきたF老婆はこの欲求不満の典型的なものであろう。

(4) 承認の欲求 「すべて人々は自己に対する高い評価や自己尊敬、自尊心、そして他者から尊重されることに対する欲求をもっている。これらの欲求を二分すると、第一は強さ、業績、妥当性、熟練、資格、世の中に対して示す自信、独立と自立に対する欲望である。第二は他者から受ける尊敬、いわゆる評判、名声、地位、他者からの理解に対する欲望である」。この欲求が満たされないと、劣等感や弱さ無能さという感情を生み出す。しかし、内容は高次なものであるから、何らかの努力が伴わねばならない。

(5) 自己実現の欲求 この段階に至ると多くの人格的、社会的欲求がひと様さまに表現される。単なる愛は隣人愛人類愛と高揚するであろう。未知なるものへの憧憬と探究、また、進んで責任と義務を果たしたい、生命を惜しまない献身等の真善美に生きんとする欲求が生まれる。マズローはいう。「欲求がすべて満たされたとしても、ひとが自分に適していると考えられることをしていないかぎり、新しい不満や不安がすぐ起こってくるであろう。人間は自分のなりうるものにならない」。ればならない」。

こうした自己実現、自己表現が徹底しゆくところ、ひとによっては自己否定をへて絶対者に帰依するという宗教の境地に至ることもあろう。これまた自己実現の一つの到達点である。

さて、「老いては子に順う」といわれるごとく、老年期は欲求水準が下がるし、老人自らもその水準を下げざるをえない。

ホームに住む老人についていえば、生理的な生活維持のための欲求と安らかに暮らしゆく安全欲求の二つは、当然満たされねばならない。しかし、せめて第三の愛情所屬の欲求までは十分に満たされねば、「生活の場」としてのホームとはいえないであろう。晩年を安らかに過ごすためには、他人だけが群れ合うホームであるから、「愛」のあるホームでなければならぬ。もともと、ホーム利用の老人たちはほとんどが不本意で入所しているからである。

任運荘の場合、五十二年一月調査で「自分から進んで入所」したのが五十二人中五人で一割弱。「ひとからすすめられて入所」は福祉関係者や家族のすすめを含めて二十八人。「いやいやながら強請入所」は十九人で、ごく一部を除いてほとんどが不本意である。

だから、まず捨て小舟のような境涯を修復してあげねばならない。そのうえ、集団生活は新しい重荷である。その重荷も除去しなければならぬ。もともと老人は心身共に韋の^{すい}ように脆弱^{びじやく}になっており、軽い風邪をひいてもすぐ死を思い恐れる。このように、「安全の欲求」は外からは測り知れないほど強烈である。

だから、老人ホームわけても特養では寮母の心から老人の心へ、そして、身体と身体のスキンシップが最も重視されるべきである。それをしも欠く時、ホームと称することはできないであろう。

私は少し話しを急ぎすぎたようだ。老人ホームでは「生理的」「安全」の二つの基本的欲求は当然満足されているという前提にたっていたが、必ずしもそうでないことは、一章の「シセツはコワイですな」でも少しだけ触れた。

施設はせめて生理的欲求を満たすことにおいて完璧まことを期すべきである。それが十分でない限り、いかに外面上派手な活動が展開されていようと偽善の域を出ない。いかに施設の社会化をめざし、入浴サービス・外来のリハビリ訓練・短期入所等にめざましいものありとしても、内部入所者に褥瘡じよく者あり、ウンコうんこ漬けのおむつ定時交換である限り、空虚であるといわざるを得ない。

しかし、このような心配は必ずしも外的外れではない。五十二年度厚生省老人ホーム監査結果報告は指摘している。「入所者処遇について」の項で、「設備及び運営基準は入所者処遇最少限度の要請ですが、設備が他に転用されたり、入浴回数さえ基準が守られていないということは問題です。給食時間、おむつ交換、家庭との連携等、施設管理面からの都合によるいわば押しつけの処遇ではなく、入所者の側に立って必要な処遇が確保される必要がある」としている（『老人の福祉と保健』46号・54・1）。

生理的要求の充足という基礎的処遇さえも、危ないらしく、報告文はくり返えしいう。「如何なる理由があろうとも、少なくとも、設備及び運営基準は遵守されねばならない」。しかし、物的な「設備基準」は細部にまで規定しているが、直接老人に関わる処遇面の基準はまだ大ざっぱで、手抜きを考える者には都合のよい基準にもなるようである。といって、もし幼稚なまでに細部にわた

る規程で運営を縛らねばならぬとすれば、福祉事業の世界も単なる福祉業界に過ぎないという嘲りを甘受せねばなるまい。

私たちがここでくどいほど、老衰期の老人の生理的な第一次的欲求の充足がホームの存在理由であると述べねばならない理由がある。それは任運荘を訪れた一婦人から、帰宅後したためた次のようなお便りを受取ったからである。彼女は夫をS県の特養で死なすに忍びず、再び家に引取って看病する。しかし、夫はやがて昇天し、今は別府市の軽費老人ホームで自分の晩年を見つめながら独り生きている。彼女の名は八木カオル（七三）さん。

この手紙こそ日本の特養ホームに対して発せられた告発の文として、謙虚に受けとめるべきであろう。

次章の始めにその手紙を掲げ、「瘡のない身体で死なせて下さい」という訴えを、特養ホームの現状の中で考えていこう。